

新潟市潟環境研究所 第1回月例会議（概要）

日時：平成26年4月16日（水）午後3時～午後5時15分

場所：新潟市役所第1分館101会議室

■会議概要

1 挨拶（市長）

- ・潟環境研究所は4月に産声を上げたばかりの研究所で、事実上今日がスタート。
- ・この潟環境研究所を今年度設置した理由は、新潟市を代表する4つの潟－鳥屋野潟、福島潟、佐潟、上堰潟について、治水面での整備の方向が定まったことや、今後地域の方がどう関わるべきか考える時期にきていることなど、新しい局面を迎えたことによる。
- ・新潟大学名誉教授であり、NPO法人新潟水辺の会代表の大熊孝先生に所長として就任いただき、客員研究員、研究補助員、外部相談員、そして事務局職員、さらに市の関係課から職員が兼務するという形で陣容を整えた。
- ・それぞれの潟をそれぞれの地域がしっかりと慈しみながら、それが新潟市全体の水と土のシンボルとなるように、あるいは新潟市の誇りとなるように皆さま方からいろいろなご意見を賜り、ぜひいい成果を出していきたい。

2 潟環境研究所の目的と研究調査の進め方（大熊孝 所長）

（目的）

- ・新潟市内を中心に越後平野の潟について、自然環境・歴史・文化を調査・研究し、潟の生物多様性を増進させるとともに、「田園環境都市構想」にふさわしい、“生業”が営めるような潟活用のあり方を探求する。

（研究・調査の方法等）

- ・「潟」を単なる自然ではなく、人と関わりの深い「里潟」という認識のもと研究・調査する。
- ・潟環境研究所の研究員等は、それぞれが越後平野の潟・川の自然・歴史・文化などに関する研究テーマを持ち、自発的に研究・調査を進める。
- ・月1回は関係者による定例会を持ち、各部局の連携を図るとともに、各自が研究・調査したことなどを発表する。
- ・シンポジウムなどを開き、研究・調査の結果を公開する。また紙媒体による広報にも努める。
- ・潟の自然・歴史・文化の記憶化をはかり、後世への伝承に努める。

3 講義「川とは？潟とは？～人の“からだ”と“こころ”をつくるもの～」（大熊孝 所長）

- ・川の定義とは「川とは、海と山とを双方向につなぐ、地球における物質循環の重要な担い手であるとともに、人間にとって身近な自然で、恵みと災害という矛盾の中に、ゆっくりと時間をかけて、人の“からだ”と“こころ”をつくり、地域文化を育ててきた存在である」。
- ・近年、川では「良い子は川で遊ばない」という立て看板をよく目にするが、このように水辺から遠ざかってしまったのは、日本には、水辺で遊ぶことの素晴らしさを伝える文学が無いなど、国民的コンセンサスがないことに一因があるのではないか？それは、水辺で楽しむ国民性を持っているイギリスとの比較で実感する。
- ・自然や水辺に触れ合うことで、子どもたちがどんどん成長していくのを目にしてきた。自然の中で遊ぶこと、水と触れ合うことに、もっと公共投資してもいいのではないか。
- ・潟だらけだった越後平野は、乾田化が進み穀倉地帯になっていった。現在残された大きな潟

は4つ（鳥屋野潟・福島潟・佐潟・上堰潟）しかない。上堰潟は砂丘湖という表示がされているが、潟湖であり、現在は掘り上げられた人造湖である。今後は細かいデータも当たって精査していく必要がある。

- ・福島潟では現在、約80haの水田を潟に戻すという治水工事をしている。今まで国内のほとんどの潟は干拓され水田化してきた。そんな中で、水田化されたものを潟に戻すのは初めてではないだろうか。
- ・現在、鳥屋野潟では湖岸堤の整備計画が示されている。反対意見もあったが、潟自体の洪水調整能力の高さと潟周辺の排水機場のポンプ能力の限界を考えると、堤防は必要である。
- ・新川は、幕末に西川と立体交差をして造られた人工水路だが、海との繋がりの中で豊かな生物相を生み出し、文化が生まれた。自然に勝ち過ぎた現在の公共事業は地域に文化を生み出していない。

【主な意見・質疑応答等】

- ・私の個人的な夢は、鎧潟の復元である。新川と通じて海とつながり、豊かな魚類、生物、そして新たな文化が生まれるのではないか。
- ・アジア・アフリカ諸国の人が旧栗ノ木川排水機場（1948年竣工）を見ると驚いていた。日本はアメリカと戦争して負けたはずなのに、なぜこのような立派なものが作れるのかと。旧栗ノ木川排水機場の水門等は残っている。何とかして残したい。
- ・鎧潟を干拓してから50年経っている。植物の種は土の中で30～50年くらいは生きられるといわれており、潟自体は戻れなくても（失われた）植物が復活してくると良いと思う。